

『コロナ時代を生きる信仰』Ⅱ キリスト者の終活を始めよう

■はじめに

今年の年頭書簡は、『コロナ時代を生きる信仰』の具体的なヒントとして、「人生の終わりのための活動」、いわゆる『終活』を取りあげます。日本社会が急速に少子高齢化に向かう中、こども世代や周囲に迷惑をかけずに人生を終わりたいと考える高齢者が増え、『終活』というものは、今をより良く生きるために有意義であると考えられるようになってきました。コロナ禍は現代人にとって、これまでの社会経済活動や個人のライフスタイルの是非を根本的に問う機会となっています。コロナ時代を生きるキリスト者として、より積極的な生き方への方向づけとして、聖書に基づいた『終活』について考えてみたいと思います。以下、文中の『終活』は、常に〈キリスト者の終活〉を指します。『終活』など早すぎると思う人は、『終活』を、『生・活』、つまり今を〈生〉きる〈活〉動のヒントとして参考にしてください。

1. いのちを豊かに受ける

「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである」(ヨハネ 10・10)。イエスのことばを受けて、いのちを「豊かに受ける」とはどんなに素晴らしいことなのか、と期待を込めてわたしたちの『終活』を始めましょう。この世での世俗的な富や成功に恵まれる豊かさではなく、死を超えてあずかる永遠のいのちの豊かさです。パウロが言うように、それは、今は鏡におぼろに映ったものを見ているが、主の再臨の時には神と顔と顔を合わせて見ることになり、今は一部しか知らなくとも、その時には、自分が神に知られているように、わたしがはっきり知ることになるものです(I コリント 13・12 参照)。

そこで『終活』の最初の作業は、わたしの記憶に溜まったものを引き出すことです。天の国のことを学んだ学者のようになり、自分の倉から新しいものと古いものを取り出します(マタイ 13・52 参照)。古いものとは神の愛を拒んだ苦い思い出であり、新しいものとはイエスの呼びかけに応えた福音の体験です。イスラエルの民は、出エジプトの出来事を思い起こし、記念する度に、民の不従順に対する神の忍耐強い導きに感謝し、来るべき救いの完成を待ち望んでいました。わたしたちの記憶の整理も、過去の自分に誠実に向き合いつつも、心は未来に向けて、積極的に明るく生きる意欲と希望をかき立てるように行います。

2. イエスの父の家が待っている

『終活』のひとつの目的は、神の愛と恵みをうけて生きてきたことへの感謝のうちに、自分がこの世に生まれてきたことの意味を確かめることです。イエスは最後の晩餐で、「わたしの父の家には、住むところがたくさんある」(ヨハネ 14・2)と言われましたが、この家とは、父と子と聖霊の三位の神が交わる〈天にある永遠の住みか〉(II コリント 5・1)です。そこには、すべての人が例外なく招かれていて、誰もがその人らしく、その人しか味わうことのできない神との交わりにあずかっているとわたしは想像します。

このイエスの父の家にたどり着くまで、御父は御子を通して、一人ひとりのための弁護士・助

け主としての聖霊を遣わしてください(ヨハネ 14・15～21 参照)。わたしたちは、この聖霊のおかげで、わたしでしか生きることのできない、わたし自身の人生を築いているのです。わたしの人生の意味や価値を、他人のそれと比較しても意味がありません。人は皆、他人によって置き換えることのできない、わたしでしか達成できない人生の意味をこの世で生み出すために、生まれてきたのだと思います。《世界で一つだけの花》となるために。

3. 安息日を心に留めよ

『終活』では自分の死と向き合うことになりますが、それは死ぬことの準備のためではなく、時間を越えた永遠の〈安息〉に向けて、心を広げていく歩みとして考えます。「安息日を心に留めて、これを聖別せよ」(出エジプト 20・8)という主の十戒は、創造主である神のわざには目標があることを想起させます。聖書全体は、「初めに、神は天地を創造された」(創世記 1・1)の句で始まり、「『然り、わたしはすぐに来る。』アーメン、主イエスよ、来てください」(黙示録 22・20)と、主の約束とわたしたちの嘆願で終わります。ダビデは、「主はわたしの羊飼い。わたしは乏しいことはありません。主はわたしを緑の牧場に伏させ、憩いのみぎわに伴われます」(詩 23・1～2 参照)と、〈安息〉を憩いとして歌いました。イエスは、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。・・・そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる」(マタイ 11・28～29)と、永遠の〈安息〉を約束してくださいました。

天地創造の目標は、神と人との顔と顔を合わせてともに住む至福の世界です(創世記 2・1～3 参照)。そのために神は、時間の中で、救済史という手段を用い、アルファでありオメガであるキリスト(黙示録 1・8 参照)の再臨によって、創造の業を完成されます。宇宙と世界の歴史も、わたしたちの人生にも終着があり、万物は〈安息〉のうちに憩います。わたしが生きている時間(人生)は、神がわたしのためにくり広げる神聖なドラマであり、〈安息〉という終幕に向かって展開されていきます。それまでの一瞬一瞬は、神の恵みを無駄にしてはならない〈恵みの時、救いの日〉(II コリント 6・1～2 参照)であり、最後は 100 倍の実を結ぶという喜びが待っているのです(マルコ 4・20 参照)。

4. 信仰の完成者であるキリストを見つめて

パウロは晩年(60 歳頃)になって、こう書いています。「わたしは、既にそれ(信仰による義)を得たのでもなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。・・・なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、・・・目標を目指してひたすら走ることです」(フィリピ 3・12～14)。ですから、わたしたちも神の導きを信じて、信仰の〈創始者〉であり〈完成者〉であるキリストを見つめながら、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜くのです(ヘブライ 12・1～2 参照)。

しかも、キリストは『終活』の同伴者でもあります。エマオへ向かう二人の弟子(ルカ 24・13～27 参照)のように、人生の挫折や失敗を経験し、後悔の念を抱くようなときには、近づいてこられるイエスを引きとめて、一緒に歩いてもらいましょう。「メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか」(ルカ 24・26)と、つまずきと目されたメシアの受難の必然性について、イエス自らが説き明かされたのは、神の救いの業は神秘であり、すべての出来事に意味があることを弟子たちに教えるためです。

コヘレトは、「何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められた時がある」(コヘレト

3・1)と語り始め、まず生まれる時と死ぬ時をあげます(コヘレト 3・2)。そして、神のなさることはすべて時にかなって美しいとまで言ったあと、「それでもなお、神のなさる業を始めから終わりまで見極めることは許されていない」(コヘレト 3・11)と戒めます。ヨブは、一連の事が起こる前には、「主は与え、主は取られる。主の御名はほめたたえられよ」(ヨブ 1・21)と、自分の生死は神の支配のもとにあると認めてはいたのですが、神はヨブの思いが真実であるかどうかを試されます。

ルカが記すように、マリアがすべての出来事を心に納めて、忍耐強く思いめぐらしていたように(ルカ 2・19、51 参照)、わたしたちも焦らずに、主への信頼のうちに『終活』を続けます。

5. 神の沈黙の意味を問う

『終活』では、神の沈黙を黙想します。〈嘆きの詩編〉と分類されている詩編では、神がともにおられるという臨在感と、神から見捨てられ、神がおられないと感じる不在感が交錯します。人は神の沈黙が続くと、自分の犯した罪に対する神の怒りか罰かと疑い、神の沈黙に耐えられなくなります。わたしたちは神を感情的に体験することを望んでしまいがちですが、神がわたしたちに求められることは、どこまでも神を信頼することです。

マーガレット・F・パワーズの「あしあと」という詩では、夢の中で、主とともに渚を歩いていた作者の人生が映し出されます。砂浜には彼女と主のあしあとが並んで続くのですが、人生でつらく悲しいときに一つのあしあとしかなかったのが、彼女は主に、「なぜわたしを捨てられたのか」と尋ねます。すると主は、「わたしはあなたを愛している。あなたを決して捨てたりはしない。あしあとが一つだったとき、わたしがあなたを背負って歩いていたのだ」とささやきます。

ヨブは、一日にして財産も健康もすべてを失い、その悲痛な出来事の意味を神に問い続けながらも、何も答えない神の沈黙に落胆します。しかしヨブ記は、すべての体験は神の変わらぬ臨在を悟るためのものであり、人間の目線からのみ、神の働きを解釈してはならないという教訓を残します。

わたしたちが過去の苦しみと闇の記憶をたどるとき、それらがなぜ、わたしの身に起こったのかではなく、それらを通して、御父はどのようにわたしを愛しておられるのか、と問いたいと思います。

6. からだの復活を信じます

『終活』の根拠は、何と言ってもわたしたちの復活信仰にあります。「からだの復活を信じます」。これが信仰宣言の頂点です。死ぬことが恐ろしい、これは人間の普通感覚です。しかし、キリスト者はなぜ死ぬのかではなくて、なぜ死が恐ろしいものであるのかについて、パウロの書簡から学ぶことができます。それは、人類の罪のためです(ローマ 5・12～6・14 参照)。最初の人間アダムの罪によって、すべての人間が生まれつき罪の支配にあるとともに、死の支配の下にも置かれていたのです。罪とは、神に背き、神から離れ、自分を神として生きようとするということです。この罪の結果、神と人間との関係が断絶状態になりました。

しかし、キリストの受難と死によって、人間の罪は赦され、神との関係が回復されます。その結果、人間は死の恐れや不安から解放されて生きることができるようになったのです。パウロは言います。「一人の罪によって多くの人が死ぬことになったとすれば、なおさら、神の恵みと一人の人イエス・キリストの恵みの賜物とは、多くの人に豊かに注がれるのです」(ローマ 5・15)。そして、罪と死の支配にある苦しみの状態は、将来わたしたちが神の子となる栄光に比べれば、

取るに足りないものなのです(ローマ 8・18～19 参照)。キリスト者は神からの無償の愛とあわれみによって生かされているという真理を信仰によって受けとめ、「キリスト・イエスに結ばれる洗礼」(ローマ 6・3 参照)によって、神の子とする霊の〈初穂〉(ローマ 8・23 参照)を受け、主とともに〈アッバ、父よ〉と祈る者とされています(ローマ 8・15 参照)。そして、この世の終わりに主キリストの復活にあずかり、永遠のいのちを生きる復活のからだ(Ⅰコリント 15・35～49 参照)が与えられるのです。

7. わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください

人生の旅路の糧として聖体をいただくことは、キリスト者の最上の喜びです。イエスは「信じる者は、永遠の命を得ている」(ヨハネ 6・47)と言われ、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる」(ヨハネ 6・54)と約束してくださいました。ただ、得ているといっても、わたしたちの救いは、〈既に〉と〈未だ〉の両方の側面があります。だからこそ、イエスは、苦しみや悲しみの多い人生の歩みに必要な糧として、ご自分のからだでわたしたちを養い、活かしてくださるのです。主の祈りの中で〈日ごとの糧を今日もお与えください〉と祈るこの糧は、主から日々いただくすべての恵みとともに、この世にいる間の〈今日〉に必要な秘跡の賜物なのです。

さらに、わたしたちは聖体の秘跡(エウカリスチア)を通して、時間を超越した神と結ばれています。洗礼によってキリストの死と復活にあずかり、聖体の秘跡を通して、復活されたキリストの天上のいのちに、この世で〈既に〉あずかって生きています。そう思うと、各自の人生の時間の総体は、ただの個人の活動の記録で埋められる箱ではなく、時間の中で神の永遠に触れている記録でもあります。たとえ、わたしが、わたし自身の記憶を思い出せなくなったとしても、わたしは神の記憶に刻まれています。『終活』では、一刻一刻と流れていく時の連続の意識の中で、神とともに生きる永遠の〈今〉を味わいます。

8. 愛がなければ、わたしは無に等しい

『終活』では、人生がこうあるべきだという〈べき論〉から卒業します。金持ちの青年がイエスに「永遠の命を受け継ぐためには、何をすればよいでしょうか」(マルコ 10・17)と尋ねましたが、救われるために何をすべきかの問いに、答えはありません。救いは、神からの無償の賜物として受けとるものです。青年に根本的に欠けていたのは、〈願望の世界〉と〈おきての世界〉とは別に、自由と喜びに満ちた〈愛の世界〉があることを知らなかったことです。イエスは、この愛の世界に目覚めるため、財産を手放すように青年に勧めます。わたしたちも、愛の世界に生きることを妨害するものが何であるかを丁寧に探し、義務で神を愛する意識から解放されて、神の愛に自由に応える愛の生き方を深めなければなりません。

パウロが愛の賛歌(Ⅰコリント 13・1～13 参照)で言うように、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、全財産を貧しい人々のために使い尽しても、誇ろうとしてわが身を死に引き渡しても、愛がなければ、わたしたちの人生には何の益もありません。信仰と希望と愛は、いつまでも残りますが、その中で最も大いなるものは愛です。だから、『終活』でこそ、愛の賛歌にある〈愛のリスト〉を日々思い起こし、実践しなければなりません。「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」(Ⅰコリント 13・4～7)。

9. 私のことを思い出してください

『終活』を行うわたしたちは、死んだら天国という樂園に行き、そこで幸せになるための〈待ち時間〉を過ごしているわけではありません。是非すべきことがあります。それは、神と人にゆるしを願うことです。だれでも、過去に犯した過ちを認めず、そのための言い訳を繰り返し、自分を正当化してきた〈未解決の思い出〉があるはずです。イエスの十字架の左右にいた二人の犯罪人の一人は、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ 23・34)というイエスの祈りを聞いたとき、神を畏れ悔い改めて、イエスが御国の完成のために来られる時に、自分のことを思い出してくださいと願います(ルカ 23・42 参照)。するとイエスは、「あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」(ルカ 23・43)と答え、この犯罪人の罪のゆるし、救いを約束されます。『終活』は、この悔い改めた犯罪人に起こったのと同じことを願う祈りの道です。

「目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません」(Ⅰヨハネ 4・20)。主にゆるしを願うわたしたちが、兄弟姉妹へのゆるしを拒むことはできません。「わたしたちの罪をおゆるしてください。わたしたちも人をゆるします」という主の祈りのことば通り、実行しなければなりません。ペトロは言います。「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです」(Ⅱペトロの手紙 3・8～10)。『終活』こそ、過去と未来のすべての出合いを清らかな愛の交わりにできる貴重な時間となります。これまで自分の力だけで生きてきたつもりが、多くの人に助けられてきた人生であったと分かれば、和解すべき人々に心を開くことができます。すでに亡くなった人や、もう直接会えない人には心の中でゆるしを願い、神からのゆるしを願いましょう。

10. わたしの若さに喜びを与える神

誰もが高齢になると、体力の限界と身体的な機能の減退を感じますが、この現象は基督教の復活信仰から見ると、パウロが言うように、内なる若さのしるしと言えます。「たとえ、わたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます」(Ⅱコリント 4・16)。内なる人は、キリストにあって新たに創造され(Ⅱコリント 5・17 参照)、日々キリストの背丈に成長し(エフェソ 4・13 参照)、栄光から栄光へと主と同じ姿に造りかえられていきます(Ⅱコリント 3・18 参照)。ダビデは、主が「鷲のような若さを新たにしてください」(詩 103・5)と賛美をささげます。昔のラテン語のミサでは、〈わたしの若さに喜びを与える神に向かって〉(アド・デウム・クイ・レティフィカト・ユベントウテム・メアム)と唱える神への賛美でミサを始めました。わたしたちの内なる若さとは、神が与える若さであり、神はそれに喜びを与えてくださるのです。

そして、内なる若さは、幼子のように神の国を素直に受け入れる謙虚な心に宿ります(マルコ 10・14～16 参照)。イエスは、こどもを神の子の本来の姿を映すものとして示されました。なぜなら、こどもは愛を必要とし、無条件で受け入れられることを求め、周囲からの愛のみを求めます。イエスが言われる〈小さな者〉(マルコ 9・42)であることこそ、人間にとって最高の価値なのです。現代のように効率、健康、成功が優先され、一方で弱者が差別され、敗者がのけ者にされる社会において、高齢になっても、「わたしは弱いときにこそ強い」(Ⅱコリント 12・10)というパウロの

ことばをあかしすることができます。

11. キリスト者のシンプルライフ

断捨離は、ヨーガの行法である断行・捨行・離行に対応して、新たに入る不要なものを〈断ち〉、すでにある不要な物を〈捨て〉、物への執着から〈離れる〉ことだと言われます。パウロは、キリストを知っていることのすばらしさのゆえに、他のいっさいのことを損失といい、キリストのためにすべてのものを失っても、それらを塵あくと断言します(フィリピ 3・8 参照)。この精神こそ、キリスト者の断捨離の極意です。イエスは、「あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ」と言われました(マタイ 6・21)。富への執着と闘い、より多く欲することをやめ、虚栄心と自己中心的な人生観から解放され、心の中に貧しい人や弱い人の居場所を作ります。

パウロはテモテにこう教えます。信仰は「満ち足りることを知る者には、大きな利得の道です。なぜならば、わたしたちは、何も持たずに世に生まれ、世を去るときは何も持って行くことができないからです」(I テモテ 6・6～7)。『終活』において、主に信頼した満ち足りた心をもって、シンプルライフを目指します。わたしたちは、自分の持ち物の所有者ではなく、管理者であり、隣人のために用いることで、神の摂理に仕える者となります(『現代世界憲章』69 参照)。いつか必要な時のために何でも物を蓄えておく姿勢よりも、神の愛に留まるために何が大切かという優先順位を見直し、未来のすべてを神に委ねて、今この瞬間を生きる喜びに満足したいと思います。そうしてキリスト者は、「神の国と神の義を」(マタイ 6・33)を求めて、「何をするにしても、すべて神の栄光を現わすため」(I コリント 10・31)に行います。

12. 元后あわれみの母

聖母マリアがその人生の終わりに、肉体と靈魂を伴って天国にあげられたことを記念する「聖母の被昇天」のミサの集会祈願では、信じるすべての人たちの救いへの希望を表して、聖母とともに永遠の喜びに入ることができるように祈ります。ロザリオの〈栄えの神秘〉の第四の黙想でも、〈善き終わりを遂げる恵み〉(文語)を願います。また、寝る前には、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」(ルカ 23・46)と唱え、最後にラテン語聖歌「サルヴェ・レジナ」か、典礼聖歌〈元后あわれみの母〉を歌います。エデンの園を追放されたエバの子孫として、この地をさすらい、涙の谷から叫びをあげるわたしたちの旅路を守り、最後に御子の御顔を見させてくださいと祈ります。聖母マリアは、わたしたちが弱く傷つき、辱められ、のけ者にされ、苦しんでいるときには、わたしたちに寄り添い、御子に助けを求めてくださいます。

中世の修道士が交わしたラテン語の「メメント・モリ」(汝の死を覚えよ)という挨拶は、「メメント・ドミニ」(汝の主を覚えよ)と同じ意味でした。〈自分が死すべき人間であることを忘れるな〉ということは、〈常にいのちの主を忘れるな〉ということです。

コロナ禍で将来に不安を募らせているこの時代に、復活信仰を生きるあかしとして、キリスト者の『終活』を始めましょう。

「マラナ・タ(主よ、来てください)。主イエスの恵みが、あなたがたと共にあるように。」

(I コリ 16・22～23、黙示録 22・20～21 参照)

2022 年 1 月 1 日 神の母聖マリアの祭日

✙ パウロ 大塚喜直